

エドガー・アラン・ポーと江戸川乱歩

MIYANAGA, Takashi / 宮永, 孝

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Society and labour / 社会労働研究

(巻 / Volume)

41

(号 / Number)

4

(開始ページ / Start Page)

41

(終了ページ / End Page)

50

(発行年 / Year)

1995-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00006822>

エドガー・アラン・ポーと江戸川乱歩

宮 永 孝

大正末に「二銭銅貨」(『新青年』大正12・4)をもって探偵小説家として登場し、ペンネームを Edgar Allan Poe の語呂をとって「江戸川乱歩」としたポーの心酔者・平井太郎(一八九四―一九六五)¹⁾が、ポーを初めて発見したのは、大正三年(一九一四)の秋――第一次欧州大戦勃発の一年後のことであるらしい。当時、乱歩は早稲田大学文学部政治経済学科の二年生(二十一歳)であった。大学部に入ると、専門の勉強のほうが忙しくなり、一般的教養を身につける時間は少なかったが、それでも暇を見い出しては文学書を耽読した。後年、乱歩は自製の「年表」に、「初めてポー及びドイルを読み、短篇探偵小説の妙味を知る」と記したのはこの時期のことである。ポーとコナン・ドイルを発見したことは、乱歩の読書歴において画期的な事件であり、かれは「先ずポーに心酔し、その三、四年後にドストエフスキーにぶつかり、これには驚愕した」²⁾という。

乱歩がポーやドイルなどの新鮮味に打たれ、探偵小説に興味をもつようになったのは、「学校の教科書にポーやドイルが入っていた関係」からであるが、かれがポーを発見するまでの過程において、わが国のポー移入史についての知識は皆無であり、本間久四郎の『名著新訳』だけは眼底に残っていた。けれど鷗外の有名な「病院横町の殺人犯」(『新小説』大正2・6)すら知らなかったという。結局、乱歩は訳本によらず、英和辞典を引き引きポーの原文を難

渋しながら、読み進んだのであるが、初めて読んだポーの作品について、「ボオの探偵小説の最初に読んだものは、ゴールド・バッグ（黄金虫）であった。あれを読んだときは、私は文字通り飛びあがって喜んだ」（私の探偵趣味）と述べている。ところで乱歩がポーの『黄金虫』の中に何を見て狂喜したのであるうか。乱歩を興奮させたものは、そこに出てくる暗号そのものであり、以後ドイルの「舞踏人形」の暗号にも惹かれ、図書館に通って西洋暗号史などを研究するようになる。

乱歩がポーからいろいろ着想を得たことは、これまでも評家によってふれられているが、ポーから具体的に学んだもの、借用の点になるとあまり明確に論じられることはなかった。乱歩は「二銭銅貨」（『新青年』大正12・4）をもって日本の探偵小説界にデヴューしたのであるが、この短篇を精読すると、いろいろな点でポーの作品を想い出させるのである。

物語は場末のみすばらしい下駄屋の二階の一間に、松村武（むし）という男と語り手の「私」がいっしょに下宿している。二人の間では芝区の電気工場で先頃起った盗難事件が話題になっていく。その事件とは、朝日新聞社の記者を名乗る身なりのよい男（実は盗賊）に、まんまと社員の月給五万円（当時としては大金）が入った支那鞆を盗まれたというものである。遺留品といえるものは、偽新聞記者が支配人室にいたときに吸っていた「フィガロ」というエジプトたばこの吸い殻だけである。刑事は市内の舶来たばこを売っている店をくまなく当るが、犯人の人相に該当する者も一人もおらず、絶望の極に達していたとき、神楽坂下のある旅館前の下水の蓋の上に、探し回っていたエジプトたばこの吸殻を偶然みつけたことをきっかけに、さしもの盗賊もついに御用となる。犯人はその旅館に立ち寄っており、それが犯人逮捕の糸口となったのである。けれど犯人は、盗んだ五万円の隠し場所については一言も漏さず、全部使いはたしてしまったの一点張りのまま獄に投じられる。

ある日のこと、「私」は銭湯から戻ると、同宿者の松村が部屋の中を考えごとをしながら歩きまわっていることに気づく。やがて机に向うと紙切れを読みだし、さらにもう一枚の紙切れをふところから出すと、それを机の上に置いた。松村は二枚の紙切れを熱心につきくらべているうちに、いつの間にか夜が更けてゆく。翌日、松村は風呂敷包みを背負って帰宅すると、問題の紳士泥棒が失敬した五万円だといって、「私」の眼の前にそれを置いた。それよりその大金を手に入れるまでの苦心談を語る。前夜、かれが熱心に眺めていたものは、「私」が机の上のせて銭湯に出かけたときの二銭銅貨と、それをいじっているうちにそこから出てきた一枚の紙片であった。それには「南無阿彌陀仏」という文字が沢山書きつらねてある。それは何やらわけのわからぬ暗号のようでもある。考えられることは、いろは四十八字を、「南無阿彌陀仏」といろいろに組合わせて置き換えたものであることまでは分かったが、それを解く方法がなかなか見つからない。松村は、そのうちに六字の組合せから、真田幸村の旗印六連銭を想い出し、そこからそれが盲人が用いる点字であることがわかった。結局、「南無阿彌陀仏」の暗号の意味は、「五軒町の正直堂印刷屋から玩具の札を受け取れ。受け取り人は大黒屋商店」ということだった。犯人は例の五万円を盗むと、正直堂に忍び込み、自分が注文した玩具の札と擦り換えておいたのである。「南無阿彌陀仏」の暗号をみごとに解いた松村は、正直堂に出かけまんと五万円を手にしたのである。が、じつは受け取った札はただのにせ物であった。正直堂というのは、語り手の「私」の親戚であり、紳士泥棒の事件が起ったとき、ひとつ芝居を打とうという気が起り、松村をかっぴだのである。あの「南無阿彌陀仏」の暗号も「私」の作ったものであった。

「二銭銅貨」に登場する松村と「私」は貧しく、下宿屋（場末の下駄屋）の二階一と間で共に暮らし、「変な空想ばかりたくましくして、ゴロゴロしている」（乱歩）。この二人は、ポーの「モルグ街の殺人事件」(The Murders in the Rue Morgue 以下、「モルグ街」とする)に登場するデュパンと語り手の「私」と相対物である。デュパンも「私」

も窮迫し、郊外の廃屋のような所で共同生活し、「話したり、夢想に耽り」（ポー）、世間からは狂人のように見られている。乱歩は「二銭銅貨」の冒頭に登場する松村と「私」を設定するにあたり、「モルグ街」のデュパンと「私」を念頭に置いていたのではなからうか。

さらに犯人を捜査中の刑事が、神楽坂下の旅館前で例のエジプトたばこの吸殻を発見する件は次のようになってい

る。

刑事は、一軒の旅館の前で、フト立ち止まったのである。というのは、その旅館の前の、下水の蓋を兼ねた、御影石の敷石の上に、よほど注意深い人でなければ、眼にとまらないような、一つの煙草の吸殻が落ちていた（「二銭銅貨」）。

注意深い観察者である刑事の目は、往来の下水の敷石に注がれ、偶然たばこの吸殻を発見するのであるが、ポーの「モルグ街」に登場するデュパンも、敷石に細心の注意を払う観察者として描かれている。

君はずっと地面に眼を落していた、——むっとした表情をしたまま、鋪石の穴や轍をちらりちらりと眺めながらね（だから君がまだ石のことを考へていることが僕にはわかったんだ）（佐々木直次郎訳「モルグ街の殺人事件」）。

乱歩とポーの描写に共通しているのは、地面の上に視線を向けている観察者なのである。乱歩が「敷石」を持ちだしたのも、ポーの「モルグ街」に出てくる、「敷石」が念頭にあったからではなからうか。

銭湯から戻った「私」は、松村が物思いに沈みながら動物園の熊のように部屋の中を歩きまわっているのを眺める。

松村はそうして、部屋の中をあっちへ行ったり、こっちへ行ったり、約十分くらい歩きまわっていた。私は黙って、一種の興味を持って、それを眺めていた。その光景は、若し傍観者があって、之を見たら、よほど狂気じみたものであったに相違ないのである。(「二銭銅貨」)〔傍点引用者〕。

狂人のように部屋の中を歩きまわる異常な光景、ポーの「モルグ街」に登場するデュパンも「私」も常人の目からみると、異常な暮しをしている。

この場所(郊外のあばら家——引用者)での我々の日々の生活が世間に知れたなら、我々は狂人と——尤も多分、害のない狂人と——見做されたに違いない。(佐々木直次郎訳「モルグ街の殺人事件」)〔傍点引用者〕

先に引いた狂人とみられるといったアイデアは、ポーの「モルグ街」から来ているように思えてならない。「二銭銅貨」という作品は、暗号を主軸としたもので、乱歩みずから作中に名を挙げているように、コナン・ドイルの「舞踊人形」(The Dancing Men)とポーの「黄金虫」(The Gold Bug)から着想を得たことは明らかである。が、乱歩は暗号のアイデアをそっくりそのまま借用せず、「それを純日本風に消化し、点字符号を使って、しかも、「南無阿彌陀仏」という特異な暗号コードを發明した」⁽⁴⁾。しかし、「二銭銅貨」に出てくる暗号は、ヒントを外国作家から得たとはいえ、生まれたものは乱歩の獨創性によるものであり、それは他の追隨を許さないものなのである。

さらに「二銭銅貨」には、ポーの「黄金虫」ばかりか、「盗まれた手紙」(The Purloined Letter)から借用したと思えるものも生かされている。盗んだ金を犯人がどこに隠したかについて松村が推理する件がある。

「俺はこう想像したんだ。そして、それが幸いにもことごとく的中したわけだがね。紳士泥棒は、万一の場合をおもんばかって、盗んだ金の最も安全な隠し場所を、あらかじめ用意しておいたに相違ないんだ。さて、世の中に、一ばん安全な隠し方は、隠さないで隠すことだ。衆人の目の前に曝しておいて、しかも誰もがそれに気づかないという、ような隠し方が最も安全なんだ。恐るべきあいつは、この点に気づいたんだ」(「錢銅貨」)。「傍点引用者」

ポーの「盗まれた手紙」のストーリーは、宮廷から書類(手紙)が盗まれる。犯人はD——大臣であることは、初めから疑う余地がない。この大臣は詩人兼数学者であり、なかなかの知恵者である。パリ警察とG——警視總監は、大臣邸を極秘裡にくまなく捜してみたが、問題の手紙はどこからも出てこない。しかし、素人探偵兼心理学者のデュパンが登場し、自分の知力と犯人のそれとを合致させることよって、いとも簡単にその手紙を発見する。それは大臣の書齋のボール紙製の名刺差の中にあつたのである。いちばん人目につく、そんな所に大事なものを隠すはずがないといった盲点を巧みに利用したものであつた。ポーは「盗まれた手紙」の中で、街路の看板やプラカードで大きな文字を使っているものは、過度に目立つために、かえって気づかずにすましてしまふ、と述べている。犯人の大臣は、あらゆる人間の眼をごまかす手段として、秘密捜査員の裏をかいて、その目と鼻のさきとその手紙を置いたのである。

だが僕は、D——の大胆な、思い切つた、明敏な工夫力と、彼がその書類を有効に使はうと思ふなら常にそれを手近に置かなければならないといふ事実と、それが總監のいつもの捜査の範囲内には隠されていないといふその高官の決定的な証言とを考へれば考へるほど、——大臣がその手紙を隠匿するのに全然それを隠しようとはしないといふ、遠大な、賢明な方策を執つたのだといふことがわかつて来たのだ(佐々木直次郎訳「盗まれた手紙」)。「傍点引用者」

つまり、盗んだ手紙を隠すためには、ぜんぜん隠さないのが、いちばんの隠匿方法である、というのがポーの考えである。乱歩は、作品の中で「世の中で一ばん安全な隠し方は、隠さないで隠すことだ」と書いているが、この考えのヒントはまさにポーから来ているのである。

その他、ポーを想い出させる作品に「踊る一寸法師」(『新青年』大正15・1)と題する短篇がある。広いテント張りの中で軽業師たちは、その日の興行が終ったあと、大当りのお祝い、とかで酒盛りをしている。それを舞台の隅の、丸太の柱によりかかって一寸法師の緑さん(子供の胴体に三十男の顔をくつつけたような怪物)が眺めている。緑さんは酒は一滴もやらない。が、仲間が無理矢理飲ませようとすると、緑さんは、「おらあ、酒は駄目なんだよ」といつてあくまでも飲もうとしない。やがて紫襦子むらさきじゆすにつかまり、あつと思つ間に酒樽の中に頭からつけられる。それを一寸法師の仲間たちがゲラゲラ笑いながら見物する。たつぷりと酒を飲まれた一寸法師は、樽の外にほうり出されるとぐつたりとなつて横たわる。そのかれの体の上を、玉乗りの美人であるお花が、またいだりしているうちに、かれの顔の上に尻餅をついてしまう。お花におしつぶされた一寸法師は、苦しそうなうめき声を上げながら彼女の尻の下でもがく。そのうちにかれはお花に馬乗りになられると、息も満足にできなくなり、半死半生の苦しみを味わう。しばらくしてやつと解放されると、次にかれを待っていたものは、残酷なキャッチボールであり、一寸法師の体はまり投げのようにもあそばされる。

それがすむと余興として、「美人獄門の大魔術」が始まり、お花は棺桶のような箱の中にそのしなやかな体を入れた。一寸法師の緑さんは、日本刀を一本ずつ、箱の前後左右にあげられた小さな孔につき通してゆくと、中から「キャー、助けて、助けて、アレー、こん畜生ノ」といった悲鳴が聞えてくる。緑さんはなおも一本、一本、刀をつき刺してゆく。そして、「今こそ思い知ったか、このすべため。よくもこの俺をばかにしたな。不具者の一念がわかったか」と

叫ぶ。箱の中のお花は、「アレー、アレー、助けて、助けて、助けて」と、なおもわめくが、一寸法師は止めようとはしない。そして、ついにかれが十四目の刀をつき刺したとき、お花の悲鳴は瀕死の人間のようなうめき声に変つていた。しばらくして緑さんは、箱のふたを開けると、青竜刀でお花の首を切り落した。切り口のところから、真赤な血が流れ出ていた。やがてかれはテーブル目がけて二、三步進むと、その生首をその上に置いた。そのとき「ホホホホホ」といったお花の笑い声がそこから聞えてきた。そのあと、一寸法師はその首を袖で隠すと、黒幕のうしろへ姿を消した。そのうちにテントの中から煙が立ったかと思うと、たちまち火が出て、それがテントを燃え上がらせた。お花の笑い声は一寸法師の腹話術であつたものかどうかは断定できなかったが、テント近くの丘の上で、子供のような人影が西瓜すいかのような丸いものをぶらさげて、踊り狂つていた。「踊る一寸法師」のストーリーは以上のようなものである。

乱歩によると、「踊る一寸法師」の着想は、ポーの「ホップ・フロッグ」(Hop-Frog) から来ている、といい、次のように述べている。

『さて「踊る一寸法師」の思いつきであるが、ポーの短篇のうちで、前々から使つて見たいと思つていた筋が二つある。一つは「ホップ・フロッグ」もう一つは「スフィンクス」である。「スフィンクス」はいまだに扱いかねているけれども、「ホップ・フロッグ」の方は、即ち「踊る一寸法師」である。翻案とか真似とかいうには、少し離れすぎているが、「ホップ・フロッグ」みたいな味を狙つて、或いは狙いそこなつて、あんなものが出来たわけです(後略)』(探偵小説三十年)。「傍点引用者」

一方、ポーの「びよんびよん蛙」の粗筋は次のようなものである。昔、ある国の王様は道化をやしなっていた。その道化は小人であり、しかも正常に歩けないところから、「びよんびよん蛙」の異称があった。あるとき、その国になにか大きな祝典があり、国王は仮装舞踏会を催すことになった。祭典の夜、びよんびよん蛙と仲間の小人（少女トリベッタ）が広間に呼び出された。王はそのとき七人の大臣らと酒を飲んでいたが、機嫌はあまりよくなかった。びよんびよん蛙が酒を好まないことを王様は知っている。足の不自由なかれは酒を口にすると、興奮し、気が狂ったようになる。だが、王は悪戯好きなどころから、無理矢理かれに酒を飲ませることを楽しみとした。その夜も王から、欠席の友人たちのために杯を飲みほせと、命じられたとき、かれの目に涙がこみあげて来、その杯の中に大粒の涙をほろぼろと落とした。そして何か新しい余興を考え出すようにいつけられたとき、故郷の仮装会でよく出した「鎖がれた八匹のオランウータン」を演じたいといった。そこで王と七人の大臣らは、メリヤスのシャツとタイツに身をかためると、それにたつぷりとタールを塗った。さらにびよんびよん蛙の提案で、オランウータンの毛に似せるため麻糸を貼りつけ、それぞれ腰に鎖を巻きつけた。広間の興奮はすさまじく、王もたいそう満足していた。八匹のオランウータンは、よろめき廻ったあとやとと広間の中央にたどり着いた。やがてうしろからついて来たびよんびよん蛙は、かれらをつなぐ鎖の十文字に交叉しているところをつかむと、やにわにそこへ、いつもシャンデリアのかかっている鉤をひっかけた。広間の連中はその姿を見て笑いこけていると、びよんびよん蛙が突然口笛を吹いた。するとオランウータンたちは突如宙づりになってしまった。この突然の宙づりに一同色を失ない、一瞬沈黙がつづいた。びよんびよん蛙は、狂気じみた怒りの表情で宙づりの八人を睨みすえると、「今やと俺には連中の正体がわかりかけたぞ」といい、王の全身を被っている麻糸に炬火を近づけた。するとたちまち麻糸が燃えあがり、その火が七匹のオランウータンたちにも移って、八人とも火だるまになってしまふ。びよんびよん蛙の復讐はもの見事に成就し

たのである。やがてかれは八つの死骸に炬火を投げつけると、天井までよじ登り、明り窓から姿を消した。この復讐劇に手を貸したのは仲間の少女トリベッタのようであった。

「踊る一寸法師」とポアの「ぴよんぴよん蛙」の主人公たちに共通している特徴は、両者とも下戸^{げこ}であり、日頃なにかと皆から笑いものになっている。これら二つの作品は、見方によっては、社会の片すみにおける弱者の暮らしの哀感を描いている。しかし、ふだん弱い立場の人間のうっ積した不満や怒りは、時に爆発し、予想もしない行動をとることがあるが、そのような感情の激発をもの見事に芸術品に仕立てたのが両者の作品といえようか。「踊る一寸法師」にもどると、酒の飲めぬ道化師の設定は乱歩とポアに共通しており、獄門のトリックはこの復讐劇のやま場でもあるが、ポアが描いた「宙づり」のトリックに倣^{なま}ったようにも思える。

注

- (1) 「ポーとドイルの発見」〔探偵小説三十年〕所収、昭和29・11、岩谷書店、七頁。
- (2) 「私の読書遍歴」〔日本読書新聞〕昭和27・5・7付
- (3) 「江戸川乱歩全集第十三巻」(昭和30・8、春陽堂、二六〇―二七八頁)。
- (4) 松本清張の「解説」〔日本推理小説大系第二巻〕所収、昭和35・4、東都書房